



加古だより

加古小学校通信
令和5年11月号
No.26 (342号)

年々パワーアップ！修学旅行

校長 吉田 博明

<自分たちで変えることができる>

先日の町校長会で、教育長から「小さな体験でも、人生の早い段階で何かアクションを起こして変えられたという経験があれば、別のアクションに向けた『経験値』になっていく。日本の子どもは、小・中学生の頃から、自分たちが学級・学校という社会を変えたという原体験に乏しいのではないか。」という大学准教授の言葉を聞く機会がありました。その話の中で、「加古小学校の運動会では、校長先生や教頭先生でなく全部児童が挨拶をしていた。」と褒めていただきました。でも、加古小学校の子どもたちは、もっとレベルが高い！

<今年はさらにパワーアップ！修学旅行>

今年の修学旅行も、旅行中、教師は何もしゃべりません。前に立つのは代表の児童のみ。細かな打ち合わせは、添乗員さんと児童が行いながら進めていきます。毎年、回を重ねるごとに、児童のレベルは上がっていきます。今回は次の予定の指示だけでなく、歩いている途中の注意喚起、「まっすぐ歩いて。」や「一列になって。」なども自分たちでやってくれます。こちらが「注意しないと！」と思った途端、自分たちでできていてビックリ。一日の終わりに行う班長会議。何時からやるのか担任の守谷先生に聞いてみると、「さっき時間があって、今のうちにやってしまいたいと子どもたちが言うので終わってしまいました。」とのこと。内容を聞いても、しっかり話し合えています。「では、教師の打合せは？」と聞くと、「要りますか?」。確かに、この一日、何も注意することがありませんでした。簡単に一人ずつ一日目の感想を話して、教師の打合せも終わってしまいました。これまで何回も修学旅行の引率をしていますが、教師の打合せが必要ない修学旅行は初めてでした。

<間違えれば、やり直せばいい>

よく言われる、「間違えれば、やり直せばいい。」という言葉。でも、実際にできている小学校はどれくらいあるでしょう。修学旅行の間、他のどの学校も、教師が前で指示を出していました。加古小学校の教師は、みんな児童の後ろで見守っているだけ。学校や自然学校など、決まった範囲の中で取り組むのではなく、修学旅行は大都市広島で、たくさんの一般の人たちの中で活動します。その中で6年生の児童は、見事に自分たちで考えながら修学旅行をやり切りました。旅行中、けんかや嫌なことは何もありませんでした。みんな、本当に仲良く、温かい時間が流れていったと思います。引率している教師まで、ついつい良い気分になってしまうような、とても気持ちのいい修学旅行になりました。6年生のみんな、よく頑張りました。素敵な修学旅行をありがとう！

